編集者に問われているものは何んだ

斎藤茂男氏の発言から考える

松沢常夫（建設一般・全日自労教宣部）・橘英實（中郵労組）・正岡幸久（全生連編集部）・八田帰一（機関紙協会）

松沢　斎藤さんが、今の時代をどういう視点で、どう斬りこみながらとらえようとしているのかを、ずいぶんくわしく聞かせてもらえて、嬉しかったし、私の狭さを反省させられました。本当に時代に迫ろうとするからこそ、一つのテーマをとことん追うことになるんだなと感じさせられました。「一見、自由に生きているように見えるけれども、実は選択の幅がきわめて狭い」「多様でも何でもない」という指摘など、〝そうだ〟と再認識させられた点がたくさんありました。

ただ、私の組合が失業対策事業で働く、いわば社会の底辺のおじいちゃん、おばあちゃんが多くて、「経済効率至上主義」から、もっとも遠いところにおかれている集団だからかもしれませんけど、「おれたちはもっと豊かな（精神的に）存在だぞ」って言いたい感じはありますね。例えば娘と心中しかけた仲間に、「貧乏はちっとも恥ずかしいことじゃない、人を搾取しないから貧乏なんだ。全日自労はみんなが家族だ、生きていて良かったといえる日は必ずくる、がんばろう」なんていう励ましの手紙が寄せられるんです。「自然と人間の共生」の問題にしても、組合としてその重要性を強調し、資源リサイクル運動などを事業団と協力してすすめています。

だから、世の中確かに、もうけさえすれば何をしてもいい、他人や外国がどうなろうとかまわない、という体質が根づいて大変な状況にあることは分かるけれども、斎藤さんが言っているような「現代の状況を切開していく力になる視点の転換」というのは、あちこちにでてきているのではないか、そこをもっと発見していくことが大事ではないか、という感想を持っているんです。

松沢さん

ちょっときつくりしましたね

橘　このインタビュー読んでいろいろ感じたのだけれど、十六の「少数派に転落させられ受けた迫害はクロシロはっきりした不正義だ、これだけ告発していても全体像はつかめない」の部分にはちょっとギクッとしました。まさに私たちは「我に正義の旗あり」とがんばっていることで労働者が労働者であること、階級的労働組合であることのアイデンティティ（identity・自己同一性）を求めているといった感じなんですが、職場の人たちからこんな話があったのです。「橘さんたちが、政党支持の自由などを強く打ち出さずに、全逓の中にとどまっていたなら、もっと官僚的な組合運動に対し文句の言える部分が存在したし、そうしたことができたのではないか」「ちょっとかっこ良くやりすぎたのではないか」と言われると痛いですね。斎藤さんの問いかけも「あなたたち、それで良かったの」と問われているように読んでしまう。

それと、以前全逓ルポルタージュ集団の中で「迫害を描く」とか「正義の旗を高く掲げ」とやってきたのだけど、「そうした部分ではとらえられない部分がある」と斎藤さんは言ってますね。そうするといままでと違うルポルタージュの方法論ということは運動論とも重なってくる問題提起として考えなければと思ったのです。確かに「物とり主義」にどっぷりつかってきた中で、それじゃダメだと要求の質が変わってきている。それをとらえるようになってきていると私は思うのです。僕らの方でもこうした試行錯誤が始まっている点はあると思うのね。

正岡　いままでの斎藤茂男さんのルポや発言は、僕が、取材をしたり

事実を大切にする意味とは

新聞編集をしていく上で大変参考になっているんです。今回のインタビューは、これだけで見てしまわないで、斎藤氏の著作や発言など全体のかかわりの中で考えてみなければならないと思うのです。例えば〝革新的〟ジャーナリズム批判とも言えると思いますが「本当は怒りがあるのにそれを勇気を持って言えない状況にあるんだから、我々が彼らに代わって、告発者として紙の弾丸を作らなければいけない」(九ページ)といった一時代前の紋切り型のルポや記事の書き方を批判していますね。『思想と現代』(白石書店)の創刊号(八五年五月)の座談会の中で斎藤氏がこうのべています。「一本調子の民主主義謳歌論みたいのがありましてね。そのフレームからはみだすような事実を非常に嫌がったというか、目の前にありながら見ようとしなかった」り、「教育問題のルポにしても、若いお母さんたちに勇気をもたせなくてはいけない、励ましてほしいというようなことを言う人がいるけれども、これは、ある意味では、民衆をバカにしているわけで、民衆自身が事実から学んで、自分を鍛えながら生きていくエネルギーを封鎖するようなものです。民衆を励まし、指導し、連れていくのが〝革新的な〟ルポのあり方なんだというような考え方が、どうもまだ、わりと進歩的とされている側にあるのではないか」と、斎藤氏は言っています。また、ルポに「こうすれば何とか助かりますよという、はっきりした処方箋」を求めることを厳にいましめていますが、全く僕は同感なんです。だから座談会で、本多勝一氏は「もっと深く素材をだすべきです。その素材がでていないのだから、処方箋なんか、とんでもないわけで、そこまで、自分でやっていないのに、多少処方箋じみたものをだしかけているのではないか。これは反省しなければならないわけで、批判はむしろ逆からあっていい」と言っているわけですね。

また、十三ページで斎藤氏は、いまの世の中で「人間が人間らしく生きることを、いかに奪われているか、その貧しさが明確になれば、まず要求が生まれてくるし、闘いの方向が出てくるんじゃないだろうか」と述べていますが、これも、とても参考になる有益な指摘だと思います。

僕も以前(本誌八三年八月号・生活記録「びんぼっ娘の詩」/いまなぜ自分史か—戦争の残酷さと不幸の根源を告発する」)書きましたが、「自分史」というか、「ふだん記」活動というか、ここ十数年、毎日、もくもくと働き生活している婦人たちが、自分の悩みや苦しみ、怒りの根源について、自分の生いたちや生活史をふりかえり、見つめ直して「生活記録」を書いているのです。全生連の『生活と健康を守る新聞』への最近の投稿をみましても、社会の底辺に生きる庶民が、これまで生きてきたなかでの差別や無念、悲しみ、怒りといったあたりをやむにやまれぬ思いにかられてペンをとりはじめているということを、ひしひしと感じるのです。

正岡さん

立場が強調されすぎてなかったか

八田　確かに「シロクロはっきりしていることだけではダメだ」は痛い指摘ですが、でも、シロクロはっきりさせなければならないことを追及しないといけないこと、まだはっきりしていない問題もありますし。しかし労働者の内面にうずまくもの。まだ言語化できていないものがあるんだ。だからこそ事実を追求しなければいけないんだと一貫して強調している点では同感なわけです。

一方、立場と事実ということを対立させるわけではないが、私たちがものを書く場合に、どちらかというと立場を前面に立ててそれを強調し過ぎるきらいがなかったか。そして、「事実を見る立場が問題なんだ」ということだけで評価してしまう。どうもそれが説得力を欠いている原因ではないだろうか、というような反省をするきっかけになりましたね。

例えば山本茂実の『あ、野麦峠』や『松本連隊』などは資本主義の過酷な搾取の実態や農家から徴兵にとられるさまが描かれているわけですが、山本氏自身の思想が革命的な反戦主義者であるかといえばそうでもないと思います。しかし、書いている事実は一貫して搾取とか戦争の正体をあばく結果になっているわけです。この点に関しては『日本の下層社会』の場合も作品と作者の思想ということでは同じことがいえるようです。

事実を大切にする意味が、これまで説得力という点だけで事実の大切さを説明していたのだけれど歴史をふり返れば、事実を語ることが時代の証言者になっている。

特に考えさせられたのは、「いま労働者の内面にあるエネルギーを見つけ出すことではないだろうか」それがまだ見えてないということです。善意でも〝思い込み〟はいけない。

不勉強がわれわれの側にありはしないか

まだ言葉にできないものを見つけ出してそれを事実で描いていく。それをやるべきなのだと思うのです。

松沢　立場と事実の問題ですが、一つは、どういう立場かということがある。住井すゑさんが『いのち永遠に新し』（労働旬報社）の中で、組織の代表なんてケチな立場じゃなく、「人類の良心の代表」としてモノを言えといっていて、ハッとさせられたんです。私もそうなんですが、同じ立場というか、同じ陣営の人の言ったことなら、まあ間違いないと思って、事実をよく確かめ、自分の頭で真剣に考えぬく、ということをしない。逆に、反対派の言うことはよく吟味しないで否定して書いてしまう、というところがあると思うのですね。国鉄の分割・民営化にしても、なぜ反対なのか、ではどうしたらいいのかと、とことん突っこまないまま紙面を作っている。だから説得力がない。やはり、「人類の良心はどう考えるか」、という立場で事実をきちんと見ていくなかでこそ「組織」も強くなるし、説得力も増すと思います。

橘さん

橘　そうだね。国鉄問題は全国民の問題なんだと僕らは言うけれど、そうは思ってない部分がたくさんある。マイカーで通勤、レジャー、帰省する状況では、国鉄がどうなろうと構わないとなってしまう。自分の生活に係わってこないと分からない。状況の変化を僕らがとらえきちっと押さえてきたのか、克明に記録しバクロしてきたのだろうかということがありますね。ただ、「今の状況はとらえられないんだ」という前提でやって「とにかくせいいっぱいやろうや」では一種の敗北主義ですね。

松沢　時代が見えなくなっているというのは、視野を浅く、狭くさせられていることも一因だと思います。国鉄の問題にしても、〝余剰人員〟みたいなことに目を持っていかれて交通体系をどうすべきかとか、資源問題とか、地域のあり方の問題とかを国民が真剣に考えられないうちに財界の思う通りの改革が強行されようとしている。とにかく臨調「行革」で、「経済効率」だけで判断する危険な傾向が強くでていますから、「赤字なものはムダだ」とパッと切り捨てて、何とも思わない青年が増えていますね。これは斎藤さんの『生命かがやく日のために』の中にある「障害者なんて殺してしまえ」という投書と通じるものがある、だから、問題を根本的に提起して、少しでも発想を変える契機を作っていかなければと思いますね。

ルポの遺産を学んでいるのか

正岡　晩聲社の和多田進さんが『編集現場でルポルタージュを考える』（晩聲社）の中に、『機関紙と宣伝』一九八四年八月号にのった「認識の混乱がルポをダメにする」を載せていますが、ここでの和多田氏の問題提起は、いわゆる革新ルポへの警鐘になっていると思います。あの発言に対し言葉尻をとらえて、一笑に付してはいけない、と思うし、斎藤さんの問題提起とも重なりあう部分があると思います。

「労働者の立場にたって書く」とか「反核、平和を目的にして書く」「会社や財界批判は意義がある」といった点も、大切ですが、そういった点が、強調されすぎると、おかしなことになるじゃないだろうかと痛感するわけです。先ほど、八田さんが、山本茂実さんの『ああ野麦峠』や横山源之助の『日本の下層社会』の例をとりあげて、ルポの迫力や意義、評価についてふれましたが、僕も、和多田さんの問題提起をめぐる一連の論義をみていると、同じような感想をもっているわけです。

例えば、松浦総三さんが、ここ数年前（一九七九年五月『記録』や八〇年七月号『新評』、『ルポルタージュ』第一号、一九八五年一月）から、機会あるごとに、「いいルポをよみなさい！」ということで、日本のルポルタージュの代表作を、二十～三十作品えらんでいます。こういった作品をいまの編集にたずさわる側が、どの程度よんで、消化しているか、もう一歩、つっこんで、いわゆる革新ジャーナリズムがそうした、日本のルポルタージュのトータルな成果や遺産のうえに、仕事をおしすすめているかとなると、僕としては、たいへん疑問で、不勉強がいわゆる革新ジャーナリズムの側にあるように思うんですね。

話をもとに戻しますが、斎藤さんの仕事ぶりに、僕が学んでいる点として格好のテキストが『事実が私を鍛える―いまジャーナリストであること―』なんです。斎藤さんは、「記者にとって取材とは何か」と問いかけ、百通りの報道、取材論があるが、「本質に迫るための大前提になるのは、なによりも、まず現象―私たちの目や耳で知覚できる素材をできるかぎり、たくさん手に入れる」ことの大切さを力説しています。つまり

たくさんの事実を集める大切さを実感

「分母(現象)」をドラスチックに拡大することです。

また、もうひとつ大切な点として、固定的なイデオロギーや価値観で事実をみてはいけません、さらに、取材者の目の高さを「徹底的に一番よわい者の高さ」「弱者の位置」「切りすてられる側に置く」ことも強調しているわけで、たいへん大切なことだと思います。

基本をさぼってはいけない

私たちの全生連・生活と健康を守る会は、生活に困っている人や所得の低い人が、生活していくうえで身近でいろいろな要求で一致した地域の住民団体で、全国に十万の会員がいます。家族ぐるみで、お年寄りから赤ちゃんまで福祉や教育、税金、医療、住宅、生活費などの要求をとりあげているので、会員構成がとても多様なのです。

こうした機関紙なだけに、いろいろなことが問題にされますが、そのうちで、いつも問題になるのが、「明るさ」なんです。それに「人間をきちんと正面すえて紙面づくりをしているか」といったあたりが、くり返し問われています。

九月下旬、愛知県の犬山で全生連の活動者会議を約五百人の参加で開き、成功しました。こうした大きなイベントを「総括する」、「どんな会議だったか」といったことを考えるとき、斎藤さんの取材論ではありませんが参加した会員の生の声や意見をどんどん聞いたり、取材するのが、一番いいわけです。ふつう、一人の記者が夜、取材するとなると、大体、三、四人が限度かと思いますが、カメラマンと、ペアになって、二晩で夫婦や子どもも入れて、十七、八人にインタビューをしたわけです。

取材していると話はつきないんですね。でも、一人三十、四十分がリミット。「この人は、どうして、こんなに明るいのかしら」「こんなに生きいきしている人の内面にひそむバネはなんなのか」など、真剣勝負になるわけで、不思議と疲れを感じないんですね。

参加者中の最高齢者で八十一歳の京都のおじいちゃんの部屋に、夜十時に行ったら寝てたんですね。でも一声かけたら、スクッと起き上がって正座して、いろいろと話してくれました。最後に「なにが今までの人生で嬉しかったですか」と聞いたんです。おばあちゃんも七十七歳で元気だから「結婚かなあ」とでも思っていたら、「戦争が終わったことだ」と言うんです。理由は、二人の幼い女の子のひもじさが、これで終わると思ったというんです。八十年余の歴史を生きてきた人の重いことばとして、ズッシリおなかにひびきました。

僕は、通常の取材でも努めて「分母をたくさん集める」主義ですが、こうした大きなイベントでは、いっそう、たくさんの事実を集めることの大切さを実感するわけです、忙しさや面倒さにかこつけて、その基本をさぼってはいけないと、いつも自戒するわけです。

見えないと思い込んでないか

橘　労働者がどこで変わりうるのか、職場の中だけの抵抗では変わっていかない。他の職場へ配転されても闘いえる労働者にどうしたらなり得るのか。千代田区は大独占の中央が集まり、争議団への支援といったかかわりが出てくる場所なのですがスモンや水俣なども、最初は「かわいそうだ」という気持で支援する。支援する中で、自分や、自分の組合が日本の中でどんなところにいるのかが見えてくる。職場へ帰って話をすると「自分を大きく感じる」と言うのです。つまり自信を持つ。「俺は俺だ」で逃げていたやつが「俺は労働者だ」という言い方でものが言えるようになる。彼にすれば交流を通して「ひどいのは俺の職場だけじゃない」と現実を重層構造で見ることができるようになったんですね。自分がどこに位置づけられ「俺にはこれしかないんだ」と分かったから彼自身は明るいんです。分からないから悲観的になったりガクッとくるのではないでしょうか。悩んで闘っているからこそ見えていることがある。障害者の問題など突きつけられるともっといい答えがでてくるのではないかと思うのです。

松沢　いま言われた「自分の位置」という問題はとても重要だと思うんです。斎藤さんは本の中で「X先生との対話」という形でいつもまとめていますが、例えば高齢者をこの社会でどう位置づけるのかというのはいろんな要求や政策を考えるうえでも、基本問題だと思うんです。斎藤さんは『生命かがやく……』の取材の中で考えさせられたこととして、「障害を持つ生命存在がこの世の中にいてくれることによって、逆にわれわれが支えられている」という〝関係の逆転〟を言っていますが、本の中でも、「障害者は進化の最先端で戦った人類戦士だ」という見解を紹介しているんですね。それを見て、先日、労働省交渉の記事を書いたとき、

記録することで職場が見えてくる

発言で出た「高齢者を人生の勇士としてあつかえ」というのを一面トップの見出しに持ってきたんです。そうしたら、さっそく共感のハガキがきました。

八田　斎藤さんというのは一貫して資本主義の構造的危機が人間をどのように抑圧し破壊してきたのかを追求してきたんですね。高度成長いらいの生産第一主義、経済効率至上主義を批判してきた唯一ともいえる骨太の記者です。「労働者がおこらなくなった」部分なんてのはもっとみないといけないところです。労働組合への不評とは一般的に言えるのだけれど、実際に労働者はどう考えているのか、空虚な安心の上に、その時その時の生活をなりたたせているといったものがあるのではないか。戦後労働運動の「負」の部分が広がりつつある中で、事実をとらえる重要性がますますあると思うのです。するどさが我々の書くものになくなってきているとも思う。

橘　若者のとらえ方でも「彼らはシラケている」とすぐでるわけだけれどそれはシラケているのではなく、ちゃんと関心持って見ているんです。じゃあ言わないじゃないか、確かにそうなんです。「言ってくれないからシラケてるのか」というと違うのじゃないか。労働運動の右傾化という問題でも、彼らは「譲歩したんだから何か取ってくれるんじゃないか」と考える。ギブしたんだからテークがあるはずだと。そうじゃないんだギブだけで得るものは何もないんだよ。こうしてこうなってきたんじゃないかという、事実で克明に明らかにすることができなかった、やり切れていないと思う。

中央郵便局でこの間、休憩時間が削られたわけだけれど、ある新婚の組合員は家で奥さんに「家へ帰っても寝るばかりだよ」と話したら奥さんはハラハラと泣いたというのです。その話を聞いた職場では、「やっぱり合理化がひどいんだ」という一般的な声が出るかと思ったら「いい奥さんだな」と出たんですね。表現の仕方が、シラケではなく違った言葉で表現している、それを僕らがとらえきれていないと思う。僕らの方で重層構造でとらえることを持っていれば、絶対に見えないことはないと思う。

ですから、時代状況に押されて、僕らの方が自己規制してしまう部分があるのと「見えないのじゃないか、見えないのじゃないか」という思い込みがあるのじゃないだろうか。

八田さん

八田　企業の中でも、隣が何をしているのか分からない。交流もないあってもそれは小じんまりとした四、五人単位の交流の域を出ていない。

橘　仕事が終わって飲むんでも最初に千円だという。それだけしか持ってないのかと言うと「いや安心だから」というわけ、気になるのは生きていくことへの興味をなくしたのではと思われるほどうちとけない青年たち、飲んでもそんなに話がでてこないのです。特に四、五十代は、若い人を「やつらは地球人じゃない」という見方なんですね。仕事上でも俺らは俺ら、奴らは奴らだという関係でしかない。

松沢　だけど、そういう青年にしてきたのは、それよりもっと年上の層の責任、組合なら幹部の責任というのも大きくあると思うんですね。私なんか、なかなかやれていないんだけど、朝まで飲んで徹底して話すなんてことをすればガラリと変わる。『じかたび』の通信員づくりの経験から言っても、大ゲンカした相手ほど、一所懸命にやる通信員になってますからね。

職場の寅さんがいなくなった

八田　以前は組合の集まりでも、ひょうきん者がいてね。でしゃばりが笑わせたりというのが必ずいたですね。今はVDTとの対話だけで、人と人との対話になれていない若い層が生まれていますね。

橘　「職場の寅さん」がいなくなったといえますね。疲れた時にひょっと一言笑わせたり、管理者をおちょくったり、労務管理のきびしさの中でそうした遊びの部分が消されてギスギスしてきますね。そんなことやったら「あいつはムダだ」なんてなる。

管理職への抵抗でも、画一的に反発するのでなく、先日もこんな話があったのです。子供が生まれるので年休を申請したら「ダメだ」と言われ、課長の前で「僕はハイとは言いませんよ」とジーッと課長の目をみつめる。そして黙って戻る。そしたら休憩時間に「都合あるからいいだろ休みな」と話してきた、すると次の打ち合わせで活動家が「今日こんなことがあったんだよ」とワーッと話すと、「いやー今日はおもしろかった」となる。そうしたことを組織できる活動家が必要ですね。それを記録する活動をやらなければいけないとやっているんです。そうしたことしていると職場全体が見えてくる。目に

草の根からの「私の要求」運動

見えない抵抗があるわけで、片ひじはった闘いも必要だけれど、それを支えている労働者とのかかわりを記録することが大切なんですね。

じつは僕の職場でここ一年で在職死亡が五人でたのです。その中の一人「寅さん」的人間が死んだんですね。四十三歳、子どもが四人で、僕は大変ショックだったのだけれど。葬式に職場の仲間がたくさん行って、ところが子どもたちは小さいから、親父が職場でどんなに慕われているかもちろん分からない、子どもたちにとって父親がゼロであってはいけない「親父は職場で若い連中をはげまし正義観を持って活動していたんだ」ということを知らせることが子どもへの育英になると、文集づくりが始まったんです。ある労働者は原稿用紙に四十枚も書いている。みんな想い出を書き始める中で、じつは自分のことを書き始める、自分自身と職場を見直すことになっている。死んだこと自体が職場をきたえることになっている。「こんなに死んでいったら困まるのは当局だよな、みんなめざめちゃうもんな」というわけです。いま多い、「突然死」が職場の中で、労組の中でどう受け止められるのかちょっと考えたですね、機関紙などで見ても「あ、どこどこの産業でやられたな」ととるのですが、「じゃ、どうなんだ」というところがない。そこが欠けているんだ。死んだ人間と生きている人間を共に大切に

人間らしく生きるために権利を

することかな。

正岡　「人を大切にする」といった点で、全生連は、お年寄りや障害者、子どもを、とても大切にしていく努力や工夫をしている組織だと思うんです。

この春、大阪・此花の〝守る会〟の婦人対策部では、週一回、会員の一人ぐらしのお年寄り世帯（約四十世帯）に〝愛のテレフォンサービス〟をおこない、とてもよろこばれています。これは、一人ぐらしのお年寄りの事故がふえている中で、仲間を事故から守ろうと、婦人が手分けをしてはじめたのです。

お年寄りからは「電話をもらって、うれしくて泣いてしまいました」とか、「電話代がかかるやろ。家から電話させてもらいます」といった感謝やお礼の声がでて、婦人からは、「はじめは怒られないかと思ったが、みんな喜んでくれはって勇気がわいた」「悩みを聞いているうちに三十分も話しこんだ」といった声がでるといった具合です。

全生連のスローガン「一人はみんなのために、みんなは一人のために」を、まさに地でいくような創意あふれるとりくみが展開されているのです。

八田　金には換算できない価値が求められているということですが、全生連の活動はその典型みたいなものですね。直接自分の利益にはならない、他人のために働き運動する、そして生活を支え合う。いわば生き方としての運動ではないかと思うのですね。障害者列車「ひまわり号」の運動にしてもそうですね。自分で金を出して、ボランティアとして参加する。そして行動の中で生きる喜びを見い出していくといった新しい運動ですね。そうした新しい芽を、もっと別の分野にも広げていきたいと思いますね。

正岡　自民党・中曽根内閣のすすめる福祉切りすての臨調「行革」路線によって、国民生活は、いわば、〝やられっ放し〟の状態だと思うんです。老人医療は一昨年、有料化にされ、健康保険も本人一割負担で、うっかり医者にかかれない実状なのです。また、生活保護者に対しても東京・荒川では、「死ぬ、死ぬ、といって、まだ死なないのか」とか、埼玉・川口では受け持ちの保護者が、自殺したところ、「万歳」と叫んだ福祉事務所のケースワーカーがいるとか、福祉の現場では、ひどい人権無視がおこなわれているのです。

私たちは、国や自治体と交渉したり、たくさんの署名を集めて請願、陳情したり小集会や班会、学習会をして、攻撃にたちむかっています。

こうした中で、全生連では、いま草の根からの「私の要求」運動を展開しているのです。

北海道の札幌・中央区では、アンケート用紙をくばっても、なかなか「私の要求」がでませんでした。でも、班会など仲間の集まりのなかで、ワイワイガヤガヤと話すなかで、「それはおかしい」「こんなに困っている」と、いろいろの要求がでてきました。

「公園の遊具がほしい」「信号やポストをつけて」「暗いから街灯をつけて」から「保育所をつくって」「税金を安くして」「生活資金や進学費用が足りない」などなど。

こうしたなかで、「公園のアカシアの木が多くて陽があたらず、ふとんもほせず、うす暗い毎日をあきらめていた」のに、ポツリと一言だした会員の悩みが、「私の要求」として役所につきつけられ、木を四本切って、陽の当たる生活を手に入れたとりぐみが、話題となっています。

つまり「ねむってしまいがちな、あきらめがちの要求や権利を、もう一度総出ししてみよう」「人間らしく生き

やろうと思えばいくらでも方法はある

るための権利や要求を見つめ直そう」ということで、身近なくらしや足元から、原点にたちかえって、国や自治体にむけてたたかいを強めています。

松沢　私も、今ほど憲法に保障されている権利を正面からぶつけてたたかわなければならない時はないと思っています。権利意識が眠らされてしまう状況ってすごいですからね。ただ、全日自労の経験から思うのには、そういう権利を確保する上で、要求だけしているようなたたかいで勝てるのか、それでは本当の意味の社会の主人公になれないんじゃないか、やはり、自分たちで自分たちの生きる基盤をつくりあげていく努力を基礎に、権利をしっかりつかんで要求闘争を徹底的にやる。それでこそ強くなるんじゃないかと思うんですね。私たちの事業団運動はそういう自己変革の運動でもあると考えているんです。

正岡　よく政府やマスコミの世論調査などから、「中流意識」論が喧伝されていますが、貧困問題の研究者が東京・中野区で調査（一九七二年）したところによると、生活保護基準以下の人口が二九・二％もあったんです。仮定ですが、日本の全人口の三〇％にもなるわけです。斎藤さんの初期のルポ『飛びたちかねつ鳥にしあらねば―現代の貧しさについて―』（晩聲社）で書いているとおり、工場や街を歩いてみて迫ってくるのは、〝何の形容も不必要なほどむきだしの貧しさ〟そのものなんですね。低所得者中心の〝守る会〟やそのまわりには、モノもない、金もない人びとが厳然と存在している。

北国で、灯油が買えず、日中、フトンにじっとしている生活保護者や高い国民健康保険料・税が払えず、保険証未交付で、子どもが病気になっても、医者にかかれないなどひどい生活実態がゴロゴロしているんです。

先ほどの中野区の例ですが、生保水準以下の人が三割近くもいるのに、福祉事務所に申請して保護をうけているのは、そのうちたった一〇％なんです。日本の福祉制度は、申請主義で、自分で役所に行って手つづきしなくてはならないんです。イギリスなどは、郵便局にハガキがおいてあって、それを役所に送れば、すぐ保護を受けつけてくれるんです。権利といった点で日本は大変おくれているわけです。

声なき人たち、生きる権利を自分から主張できない人たちが、原点にもどって、改めて〝生きる権利〟を声高く叫ばないと生きていけなくなっているんです。それだけに全生連は十年前にだした「権利宣言」を、今日的に手直しをして「新権利宣言」をだそうとしているわけです。

また、先ほどの心の問題との関連で言うと、僕は、それは文化の問題だと思うし、ここでも〝権利としての文化〟が問われていると思うんです。憲法二十五条では、国民の生存権保障に文化的とあるわけです。それは教育権であり、学習権であり、労働権であり、幸福追求権であり、豊かに生きる権利なのです。

いろいろ議論されていますが、地域社会の民主勢力の弱さに対していま、臨調「行革」路線の嵐が吹きまくっていると思うわけです。文化も、教育も、地域も、大資本によって金とモノによってからめとられ、支配されようとしていると思います。

それだけに、こうした心＝文化の分野でも、もう一度、憲法や教育基本法、社会教育法、図書館法、公民館法などの原点に立ちもどって、闘わないと、〝勝てない〟と思います。その意味で、文化も、一から十まで権利だと言えますね。

編集者が動かなければいけない

八田　斎藤さんは「やろうとすればまだできるじゃないか」と述べていますが、やはり編集者の側が、いま動かなければいけませんね。問題を投げかける熱意、動いてものを書く努力が何よりも大事ですね。足を運び、話を聞く、その単純なことがやれてない、頭で書いてしまう。この悪いクセを直したい。

松沢　いまの組合の現状の中で、機関紙だけどうこうとはいかないけれども、斎藤さんのいうように、「やろうと思えば、いくらでも方法はある」と思います。何のために何をやるのか、につめていかなくてはと思っています。

橋　身の回り主義ではないけれど多様な現実にふれていく、そこに自分の方から入っていく。編集者の連帯が問われていますね、カベを無視しても走るしかない。どうしても組合機関紙は自分のところだけに埋没する。それはある意味で楽なんだけれど、やはり片方の足は外に出さないと自分の立っている場所も見えなくなってしまう。

正岡　斎藤さんが、講演をするとき、よくコップに鉛筆を入れて、現象と本質の違いを説明しますね。この精神から、つねに学びたいと思います。

そして、団体機関紙にとって、一番大切な点のひとつである〝会員・読者の紙面参加〟を、ドラスチックに追求すれば、必ず、いい新聞づくりができるんではないかと初心にかえって痛感しているわけです。

（文責編集部）